



TITLE:

<論文>フリースクールにおける学習支援: 学習支援ニーズの高まりと居場所づくり

AUTHOR(S):

井上, 烈

CITATION:

井上, 烈. <論文>フリースクールにおける学習支援: 学習支援ニーズの高まりと居場所づくり. 教育・社会・文化: 研究紀要 2013, 13: 17-32

ISSUE DATE:

2013-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187280>

RIGHT:

フリースクールにおける学習支援

- 学習支援ニーズの高まりと居場所づくり -

井上 烈

The learning support in Free school
“Between inclining the needs of the learning support and making *ibasyo*”

Takeshi INOUE

1.はじめに

学習支援を取り上げる必要性

近年、不登校生の居場所であるフリースクールにおいて、進学や就職に必要な学力を身につけるための教科学習を主とした学習支援のニーズが高まりつつある。子どもたちの高校や大学への進学や一般企業への就職といった狭義の社会的自立を考えた時、一定の「学力」が必要不可欠であるという認識が強くなってきたからであり、その背景には、文部科学行政による不登校現象の捉え直し、それに伴うフリースクールの在り方の変容が関連していると考ええる。

1993年の森田洋司が中心となって不登校経験者に対して行った大規模調査において、不登校経験者が狭義の社会的自立においてしんどさを抱えている状況が明らかにされた。調査結果を受け、中央教育審議会は2003年「今後の不登校への対応の在り方について」の中で、不登校問題を「こころの問題」としてだけではなく、「進路の問題」とリンクさせて捉え直しを行っている。

この不登校問題の捉え直しは、学校における不登校対応に、進路や学力の保障という新たな切り口を与えた。フリースクールも例外ではない。2000年代は、東京シューレが1986年にスタートしてから20年が経つ節目であり、学校から距離をおきながらフリースクールで教育を受けてきた子どもたちが大人になり社会で活躍するようになる年代でもある。学校に行かなくとも、自己実現や社会的成功を収めたというフリースクールにおける教育の成功譚が語られる一方で、フリースクールを経て社会に出てみたものの、社会的不利益に直面しがちである現状が徐々に浮き上がってきており、貴戸(2004)はそういった不登校経験者の社会における葛藤を丹念に聞き取りながら、不登校経験者のリアリティを描き出している。⁽¹⁾

そういった現実の中では、「学校に行くのも一つの生き方だが、学校に行かない生き方も認められるべきだ」「学力よりも自分がどう生きたいかが大事」(奥地 2005)といった学校から距離をとるためのロジックで自己の正統性を主張してきたフリースクールでも、基礎学力を保障するための学校で行われる教科学習の必要性から距離をとることは難しい。また、フリースクールは公的な助成を受け難いため、経営的に非常に厳しく、生徒獲得のた

めに社会のニーズを受け入れざるを得ない側面もある。

加えて、公的な学校との距離を縮め、フリースクールが「連携」や「学校化」という変容を遂げていることも特徴的である。「連携」や「学校化」することで、子どもたちの学力保障やフリースクールで学校卒業資格を与える教育課程を編成することもできるようになり、結果的にフリースクールにおける学習支援のニーズに応えることにもつながる。

一方で、公的な学校と対立的に距離をとって形作られる居場所であるフリースクールでは、子どもの興味・関心に沿った「教科」横断的な学習が重視されている。公的な学校で行われる教科学習のスタイルは、フリースクールの学びの在り方とは形式面で相反するものだと考える。⁽²⁾つまり、現在のフリースクールにおいて、学習支援の実践が積極的に取り入れられている状況は、フリースクール本来の性格を考えると非常に特異な状況であるといえる。

そこで、本稿では、フリースクールにおける学習支援の機運が盛り上がってきている中で、フリースクールの中に学習がどのように取り入れられながら実践されているか、実際の事例を基にして考察していく。フリースクール的な学びを理念として掲げるも、教科学習を取り入れながら変容していくフリースクールの姿を描き出すことが本稿の目的であるといえる。

2. 先行研究

フリースクールの実態に関するエスノグラフィー研究

フリースクール内部についてのエスノグラフィー研究は数多く存在する。フリースクールに限らないオルタナティブな学び舎の実態を俯瞰的に捉えた国立教育政策研究所(2003)の報告やフリースクールに在籍する当事者たちが中心となって行われたフリースクール全国ネットワーク(2004)が先駆的な研究として挙げられる。しかし、研究の特性上、フリースクールに関する基本的な傾向を描き出すことに目的を置いているため、本稿の問題意識を満たすには少し物足りない。一方で、フリースクールにおける相互関係をミクロの視点で捉えた研究もある。森田(2008)は、フリースクールにおける構造化されていない子供たちの日常の過ごし方を丹念に記述することで、フリースクールにおける独特な学びの形態を切り取ってみせている。佐川(2010)や井上(2012)は、感情管理という視点から、フリースクールにおけるスタッフと生徒の相互作用場面を読み解き、その文脈の中で感情管理をこなすスタッフの姿に光を当てている。これらはフリースクールにおけるまさにフリースクール的な学びや関係性の在り方について示唆を与えるものではあるが、学習支援の実際にはあまり目が向けられておらず十分ではない。

フリースクールの定義を巡る議論

フリースクールを研究対象とする場合、フリースクールの定義が曖昧であるため、どのようなフリースクールを対象に据えるかによって大きく結果が異なってくる。学習指導を

中心とした学校的な雰囲気が強い場所も存在するし、医療機関と連携を図り専門的な支援を目的とする場所も存在する。そのようなフリースクール群をどのような類型で捉えるかについては様々な議論がある。学校制度との関係性によって類型化を図ろうとした吉田(2002)は、自ら公教育制度の中に位置づけられることを志向する「進入型」、公教育制度とは距離をおきつつも学校と連携を図っていこうとする「連携型」、公教育制度とは完全に距離をおく「独立型」で捉え、また高山(2012)は、学校の補完的な役割を果たす「補完型」、学校と対立的なイデオロギーを有する「対抗型」、不登校支援という目的は表立っては掲げないが、結果的に不登校の子どもも包摂している「代替型」の3類型で捉えている。

本稿では、東京シューレが中心となって理念を共有しているNPO法人フリースクール全国ネットワークに加盟のフリースクール団体をフリースクールとして定義したい。NPO法人フリースクール全国ネットワークのホームページの冒頭には「私たちは、既存の学校制度のみにとらわれることなく、子どもの最善の利益と、学び・育つ権利を保障するために活動する全国のフリースクール・フリースペース・ホームエデュケーション家庭のネットワーク等が連携し、活動しています。」(NPO法人フリースクール全国ネットワーク HP <http://www.freeschoolnetwork.jp/aboutus.html> 2013/1/27)という紹介があるように、加盟しているフリースクールは既存の学校制度と距離をとる形で立ち上がってきたフリースクール群であると言える。

では、このようなフリースクール群はどのような特徴をもっているのだろうか。筆者自身が実施した質問紙調査から得られた結果を基に概括したい。⁽³⁾

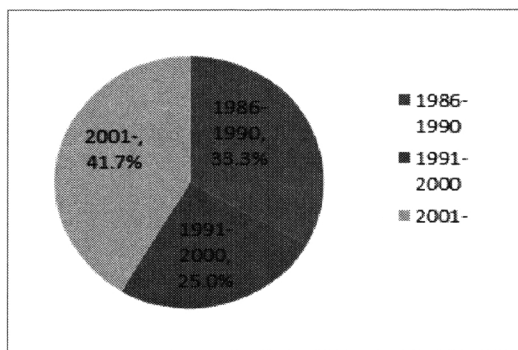


図1. 加盟フリースクールの設立年 (n=24)

図1は、NPO法人フリースクール全国ネットワーク加盟団体を設立年に従って「1986年 - 1990年」「1991年 - 2000年」「2001年 - 」の3グループに分類しなおしたものである。東京シューレが誕生した「1986年 - 1990年」は全体の約3分の1を占めているが、文部科学省が不登校問題を「進路の問題」と捉えなおした「2001年 - 」が41.7%と比率が一番高い。調査対象群が、東京シューレを先駆けとする日本型フリースクールが広がっていった1980年代に設立したフリースクールから、近年に誕生したフリースクールまで万

遍なく捕捉していることを示している。

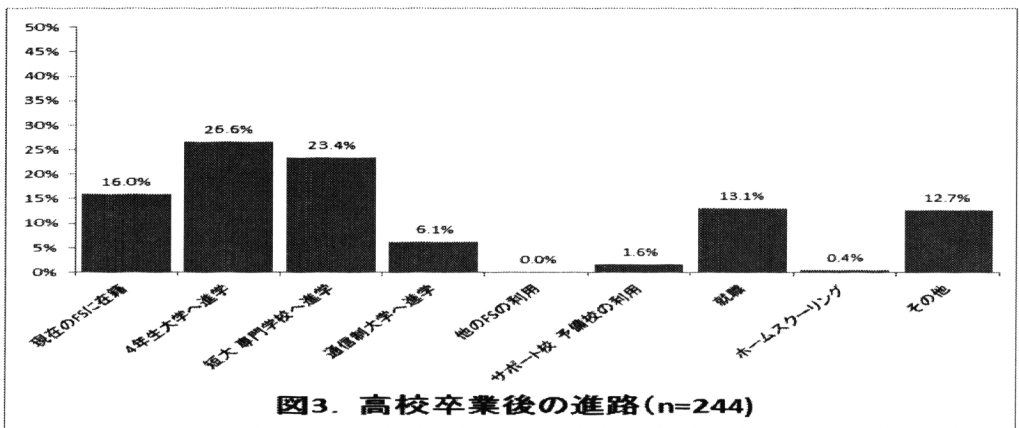
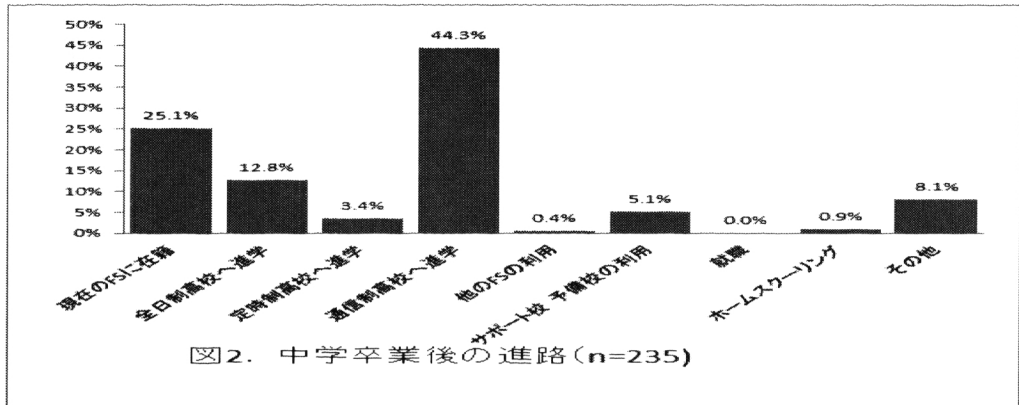


図2と図3は、中学卒業後と高校卒業後の子どもの進路について、各分類項目の過去5年間の延べ人数を尋ねた質問に対して得られた結果をまとめたものである。

図2の調査結果をみると、通信制高校への進学や現在のFSに在籍し続けるという進路選択が大部分を占めている。また、全日制高校への進学も12.8%見られるが、チャレンジスクールや不登校生に特化したカリキュラムの高校も含まれている。一方で就職という進路選択は見られず、その他の内訳は、「把握していない」「(子ども自身が) 検討中」で占められていた。

次に図3の調査結果をみると、4年制大学や短大・専門学校への進学が半数を占め、就職という進路選択が13.1%を占めている。就職の内訳は、「地元の製造業」、「コンビニエンスストア」「飲食業」のアルバイト、「自営業」を手伝うといった非正規雇用や親の経済資本を活用した進路選択である。しかし、「現在のFSに在籍」という項目が16.0%を占めており興味深い。この調査結果から、こういった動機でフリースクールに在籍し続けて

いるのかという部分まで論じることは難しく早急だが、何らかの理由で進学や就職をしないできない子どもが一定数いることがわかる。その他の内訳は、「把握していない」「未定」、「海外留学」「結婚」で占められていた。

図2と図3を通して、フリースクールを経た子供たちの大半は、既存の学校制度の中に再び戻っていきっており、自身のキャリアプランと不登校経験との折り合いをつけていこうと模索している姿が思い浮かぶ。

あるフリースクールの卒業生が「選択したのではなくて、ただ前にも後ろにも1ミリも動けなかった」とその行き詰まり感を語るように、フリースクールに在籍し続ける子どもたちは「学校」と意図的に距離を取ろうとしている訳では決していない。「このままではいけない。自分の人生やしこのまま終わ리たくない」という焦燥感が学習支援のニーズを生じさせるのかもしれない。⁽⁴⁾

4. 調査の手続き

調査手法

筆者は、2008年9月からスタッフとしてFSに関わっており、本稿の問題関心に基づき、2012年4月から6か月間、週2回の頻度で参与観察を行ってきた。参与観察では、高校3年生にあたる生徒を中心にして、学習支援の場面をフィールドノートに記録した。そして、その観察結果を基にして、保護者2名に対して各人1時間程度の半構造化インタビューを1回ずつ行っている。生徒に対しては、インタビューという形はとっていないが、日常の関与場面で、学習支援について質問して得られたデータを採用している。その際、口頭でデータの使用許可を得ている。高校3年生という時期は、直前の進路選択に際して、学習支援のニーズが如実に表れやすい時期でもあり、フリースクールにおける学習支援の実際が見て取りやすいと考えるからである。ただし、必要に応じて過去のフィールドノートも参照し、卒業生の高校3年生時の記録も分析の対象に加えている。

調査対象フリースクールA

本稿では設定した問題関心に答えるために、関西にある某FSを対象としたフィールドワークを行った。ここは、1990年7月に設立され、前身は代表が運営していた学習塾であった。東京シューレの奥地圭子氏との親交が深く、全国FSネットワークに加盟登録されている。また、生徒からの月会費（32000円）を徴収するものの、公共団体や一般企業が公募する助成金によって大部分を賄っており、運営費は決して潤沢とはいえない。そういった中で、フリースクールAは、2010年に技能連携校として認定され、通信制高校とも連携をはかるようになった。フリースクールで主体的に編成した学習カリキュラムを通信制高校のカリキュラムとして置き換えることができ、単位認定評価も独自に行うことができる。生徒数は2012年12月1日現在で、28人（男女比9:19）である。

調査対象者の属性

図1「調査対象者の属性」は、調査対象となった生徒と保護者の属性をまとめたものである。生徒は高校3年生段階の生徒に限定している。ただし、高校3年生段階というのは、高校在籍年数が前籍校と合わせて3年目という意味であり、必ずしも同年齢ではない。入学時の年齢が異なっていたり、前籍校から編入してくるまでの間にブランクがあったりするため、生徒の年齢は17歳から20歳までと様々である。生徒Bと生徒Cは、過去の参与観察記録を参照する形で調査対象に含めている。

また、筆者が親の会に参加する中で、調査協力を得られた保護者2名も調査対象となっている。今回調査対象となっている生徒の保護者ではないが、保護者への調査は、保護者側の学習支援に対するニーズや思いを知るうえで必要不可欠である。

あと、参与観察場面で得られた相互作用場面やインタビューという形をとらずに採集されたここで示した調査対象者以外のデータを適宜使用する場合がある。それらはフィールドノーツ（以後、FNと表記）に基づくものである。

表1. 調査対象者の属性（2012年12月1日現在）

名前	性別	学習支援ニーズ	現状	卒業年	入学の経緯
生徒A	女	大学進学	私立大学合格	2013/3(予定)	前籍高校から編入学
生徒B	男	大学進学	予備校で浪人	2012/3(卒業生)	前籍高校から編入学
生徒C	女	大学進学	海外留学	2012/3(卒業生)	前籍高校から編入学
生徒D	女	専門学校進学	未定	2013/3(予定)	前籍高校から編入学
生徒E	男	基礎学力	未定	2013/3(予定)	前籍高校から編入学

名前	性別	学習支援ニーズ	子どもの学年	子どもの性別	入学の経緯
保護者A	女	基礎学力	高校2年	男	フリースクール内部進学
保護者B	女	基礎学力	高校1年	女	中学校卒業後入学

5. フリースクールにおける学習支援

「フリースクールらしさ」と「進路保障」

フリースクールAが技能連携校の認定されたのは2010年4月だが、それまでは、高校段階の子どもは通信制高校に入学し、在籍している通信制高校のカリキュラムに沿って学習を行うのが慣例であった。代表は「通信制高校は自分のペースで学習できるっていう良さはあるけど、スクーリングで結局は通学しなあかんし、全部をフリースクールで見たいんや」（FN:2009年11月）と語る一方で、生徒数の減少からフリースクールに使用している校舎の賃貸料や光熱費の支払いが困難になったことを背景に、「やっぱり認定があるのとなないのでは親の信頼も変わってくる」（FN:2009年11月）とも語っている。フリースクールAの技能連携校認定への路線変更には、生徒の進路保障を高校卒業段階までフリースクールで担いたいという思いと、経営難による生徒獲得戦略という二つの側面が垣間見える。

しかし、その際にスタッフの間で技能連携校認定の申請に関する是非を問う議論が起こ

っている。今までの「フリースクールらしさ」⁽⁵⁾がなくなってしまうのではないかという議論である。技能連携校として認定されるためには、教育委員会の審査をクリアすることが条件で、教員の資格だけではなく、校舎施設の状況などもチェックの対象となる。2009年10月の審査での教育委員会の回答は、オープンスペースだけではなく、一定人数の集団授業ができるような「教室」をつくる必要があるというものであった。その回答を受けて、フリースクールA内に「仕切り」をつくることで条件を満たそうとしたのだが、その取り決めに対して、「フリースクールの自由な雰囲気が失われる」「そこまで無理をして認定をとる意味があるのか」(FN:2009年10月)といったスタッフの意見が出された。また、技能連携校認定をうけることで、教育課程に則って設置しなければならない科目や必要最低限こなさなければならない学習課題が子どもの意思に関わらず課されることになり、子どもの「自主性」や「主体性」を尊重するという理念が損なわれる可能性も指摘された。最終的には、代表の強い思いから、押し切る形で技能連携校認定を取得することになる。

フリースクールAにおける学習形態

次にフリースクールAで行われている学習形態について、図2「フリースクールAにおける学習形態」にまとめている。フリースクールAには、大きく分けると3つの学習形態が確認できる。ひとつは英語・国語・社会の科目ごとに月に2回程度行われる講義である。これは教員免許を所有する外部講師を中心として、ホワイトボードを前にした大きなテーブルを生徒が座って囲む形で、毎回10人程度の出席者で行われる。教科の枠組みは英語・国語・社会となっているが、内容は教科書に沿った教科学習ではなく、生徒の関心を引く教養的な事柄が中心となっている。「教科書に沿った事柄よりも、子どもが面白いと思えるような実際の体験を中心とした話のがおもしろいやろ」(FN:2010年4月)という代表の講師への要望に従って、講師が授業内容を構成しているからだと考える。

もうひとつは、生徒が各科目のレポート課題をこなす自己学習が挙げられる。提携先の通信制高校から渡される卒業単位認定に必要なレポート課題であり、高校卒業資格を取得するための中心的な学習となる。締め切りが設けられており、各自が自身の計画に従って自由に行うことが前提となっており、生徒から申し出があった時以外は、特に講師やスタッフが学習に関して干渉することはない。家に持ち帰り、家庭学習として課題を仕上げる生徒もいる。ただし、理解度や正答率よりも仕上げて提出するという部分に重きが置かれており、提出することが評価の対象となる。

最後に、大学入試や高校入試に際して、通常の学習では不十分である場合に別途行われる個別学習がある。生徒側からの申し出や保護者の希望に合わせて、講師と生徒の都合を調整し、個別指導の形式で行われる。講師の役割を既存のスタッフが担う場合もある。この場合、教える側の能力以上に、生徒との相性が最優先され、生徒が学習に対して嫌悪を感じないようにすることが重視される。

表2. フリースクールAで行われている学習形態

学習形態	科目	学習内容	頻度
講義	英語・国語・社会	外部講師によって授業が行われる。英語や国語という科目形態をとっているが、フリースクール側の要望により、教科知識に限らない一般教養的な内容で構成される	月に2回ずつ
自己学習	各科目のレポート課題	卒業単位認定に必要なレポート課題。提携先の通信制高校から課される。基本的に講師やスタッフが関与することはないが、生徒からの申し出があった場合は、個別学習の設定をする場合がある。	随時
個別学習	数学・英語など	大学入試や高校入試に際して要望があった時のみ行われる。市販の問題集等を使用した学習が中心となる。	随時

6. 事例検討

本節では実際の事例に即しながら、個別学習の場面に限定して学習支援の事例検討を行いたい。個別学習の場面に限定する理由は、フリースクール後の進学や就職を意識して行われる教科学習であり、学習の成果によって合格や不合格という客観的評価が付きまとうシビアナな一面をもっている。講義は、技術連携校認定の特色を活かして、教科学習という形式をとりながらも、内容は生徒が興味関心をもつ教養を中心としたものにする事で、自己学習では、卒業単位に必要な教科のレポート課題ではあるが、子どもの「主体性」に任せることで「フリースクールらしさ」との折り合いをつけている。よって、個別学習の場面が、他の学習場面よりも進学や就職に必要な学力を身につけるための教科学習と「フリースクールらしさ」との折り合いをつけようとする事例として描き出しやすく、変容しつつあるフリースクールの現状を考察しやすいと考える。

保護者がもつ学習支援ニーズ

まず、保護者はどのような学習支援ニーズを持っているのだろうか。フリースクールAには、月1回定期的に開かれる親の会という集まりが存在する。親が子どもの現状や子育てにおける悩みを共有し、フリースクールAにおける子どもの様子を参加者全員でやりとりすることが目的となっている。

全ての親に対して開かれてはいるものの、参加の度合いには偏りがあり、親の会に見られる保護者の声が全てではないが、保護者の学習支援に対するニーズは大きく2つに分け

られる。ひとつは、フリースクールでの過ごしを大切にすべきで、学習は高校卒業資格を取得するための最低限で構わないというニーズである。

調査者：フリースクールの学習にはどのようなことを求めていますか？

保護者 A：高校卒業資格はとってほしいと思っています。でもやっぱり勉強だけではなく、自由にのびのびと色々なことを経験してほしいですね。ここには中学生の時からお世話になってますし、学校に行ってるときは元気がなかったのが、ここに来て生き生きするようになって。だから、私もフリースクールの活動に子どもと一緒に参加して、いろんなことを学んでみようって。人生勉強ですね。子どもは親が来るのを嫌がりますけどね。

調査者：高校卒業資格をとった後について、お子さんと話し合ったりするんですか？

保護者 A：あんたのしたいことをしなさいって言ってます。無理やりやらされても続かないですし。とりあえずはゆっくり過ごしてやりたいこと探して。そうなった時、必要だったら勉強するでしょうね、自分から。でも、やっぱりいつかは独り立ちして、結婚もするだろうし、生計を立てていかなければならないですから、何かしら働いて自分の家族を養っていけるような道は選んでほしいですね。だから、そのための勉強はちゃんとしときなさいよって。やっぱり高校ぐらいは卒業しとかなないと、なかなか難しいですし。

(2012 年 10 月：インタビューデータ)

保護者 A の語りからもわかるように、フリースクール A に全幅の信頼をおいており、学校的な学びから距離を置くことに価値を見出していることが読み取れる。しかし、「やっぱりいつかは独り立ち」と語るように、将来的な社会的自立を強く意識しており、そのための学習の必要性は感じている。ただ「無理やりやらされても続かない」というように、フリースクールでの活動の中から目標や将来の夢を見出して、それをモチベーションとした学習こそが子どもにとって必要だと考えている。

もうひとつは、フリースクールの活動よりも子どもの学習を重視してほしいというニーズである。こういったニーズは、技能連携校認定を受けた後に入学してきた生徒の親に多く見られる。フリースクール A を、フリースクールというひとつの学校として捉えていると考えられる。

調査者：フリースクールの学習にはどのようなことを求めていますか？

保護者 B：うちの子どもは中学校にほとんど行けてなくて、なんとか卒業式まで行きたんですけど、うちの子にいける高校ってあるのかなって、試行錯誤したときにこのホームページを見つけたんですね。実際見学に来たら、アットホームな感じで、子どもも気に入って。この学校ならいけるかなって。うちの子は中学校の学習がほとんど

できてないんで、まずはそこをしっかりと教えてやっていただきたいです。それは入学時にも先生にお伝えしたんですけどね。やっぱり学習あってこそその学校ですし。

調査者：学習についてもっとこうして欲しいということはあるですか？

保護者 B：将来的には大学なり、専門学校なりに進学してほしいですし、そのための学習が十分なのかなって思うことがあって。やっぱりもうちょっと学習時間を増やしては欲しいなとは思いますが。自由な活動っていうのも必要やとは思いますが、子どもも楽しんでやっではいるんですが。

(2012年10月：インタビューデータ)

保護者 B の語りでは、フリースクールという呼称は見られず、フリースクール A を「学校」と呼んでいる。フリースクール A を不登校生の居場所というよりも、数ある学校の選択肢の中のひとつとして捉えており、フリースクールの活動ばかりに傾倒してしまうことに多少の違和感をもっている。

こういったニーズの差異に、「やっぱりある程度とりいれていかんと、フリースクールがたちいかへんしなあ」(FN:2012年10月：代表)と述べるように、経営的な側面から「フリースクールらしさ」との折り合いをつけていく必要性が出てくる。そういった中でどのようにフリースクール A における学習支援が成り立っているのだろうか。

生徒側にみる学習支援ニーズ

生徒がもつ学習支援ニーズを考えると、高校3年生段階で大学・短大や専門学校を志望する生徒が多く見られる。表1で整理しているように、進学をのぞむ生徒は全て一定期間普通高校に在籍していた経験があり、前籍校が合わない、馴染めないという理由でフリースクール A に編入学してきている。フリースクール A への入学は、前籍校での挫折経験を踏まえてやり直す意味合いが強く、学習支援ニーズも入学当初から進学を志向している。ただし、進学という目的をかなえるためにフリースクール A をどのように「活用」するかには違いが確認できる。まずは生徒 A と生徒 B の「活用」の仕方の事例から、生徒自身がフリースクール A の学習支援をどのように捉えているかを見ていきたい。

<事例1>

生徒 A は、高校2年次にフリースクール A に編入学する。当初から大学進学を志望しており、フリースクール A の学習に参加しつつも、大学進学のための受験勉強に関しては外部の予備校を利用している。当初個別学習の機会は設けられたが、本人の希望によりとりやめになる。(FN:2012年10月)

<事例1>は、フリースクール A の学習支援を高校卒業資格取得のための単位認定に関する内容のみに活用し、それ以外の進学に関する学習は外部の予備校に頼るパターンであ

る。編入学当初は「学校に行くっていうか、合わせることで精いっぱい、受験の勉強まで気が回らなかった。でもすこしづつ余裕がでてきたし、歴史の勉強がしたいなって、歴史の勉強ができる大学に行きたいなって」(FN:2012年10月:生徒A)と語るように、フリースクールでの過ごしの中で、彼女の進学への想いが固まってきたことが読み取れる。その彼女の志望に合わせて、外部の男性講師⁽⁶⁾の個別指導の機会が設けられたが、当勧画されたようには行われず、本人の希望によりとりやめになる。その理由について、「男の先生って私ちょっと苦手やし、本気で大学目指すなら予備校とか受験専門のどこに行ったほうがいいかなって思ってた。フリースクールで勉強するんはまたちょっと違うかなって」(FN:2012年10月:生徒A)と語っているように、生徒Aは2012年夏ごろから、外部の受験予備校に通うようになる。

一方で、外部の男性講師を積極的に活用したのが生徒Bであった。生徒Bは、前籍校が進学に特化した高校であり、編入学当初から強く進学志望を示していた。「みんなでいろいろするんは苦手やし、参加せんでいいんなら別にいいかなって。」(FN:2011年10月:生徒B)と述べるように、フリースクールAの活動にはあまり参加せず、家に引きこもりがちではあったが、外部の男性講師との個別指導は週に1度曜日を決めて定期的に活用していた。⁽⁷⁾

これらの個別指導は、基本的にフリースクールAの近くにある別校舎で行われることがほとんどで、フリースクールAで行われる活動と干渉しあわない形で実施されていた。

生徒Aの事例は、進学のための学習をフリースクールには求めず、外部の予備校に通うことで学習支援ニーズを満たそうとしている。フリースクールAの活動には積極的に参加しており、彼女の中でのフリースクールAは「心の居場所」という位置づけが強いと考えられる。実際に予備校に通いだしてから、「予備校の雰囲気って息苦しいし、お昼ご飯の時ぐらいいは戻ってこよかなって」(FN:2012年10月:生徒A)と昼食の時間だけはフリースクールAに戻ってきて友人と一緒に食事をする姿も見られた。

一方で生徒Bの事例は、フリースクール内の学習支援環境を活用しているものの、フリースクールAの活動にはあまり参加せず、進学のための学習に特化していた。彼の中でのフリースクールAは「学習塾」という位置づけであり、個別指導が行われない日も別校舎で一人きりで自習する姿が見られた。

「心の居場所」としてのフリースクールAを求める生徒Aは学習支援を内部には求めず、「進学塾」としてのフリースクールAを求める生徒BはフリースクールAでの活動に一定の距離を置いている。これらは生徒側にみられる学習支援に対する捉え方の違いの一事例といえる。

「フリースクールらしさ」への回収

フリースクールAという組織では、学習支援をどのように捉え、評価しているのだろうか。フリースクールAで行われる外部向けのフォーラムや不登校生の声を聴く会などでは、前述のような事例はあまりとりあげられない。成功譚として取り上げられるのは、希望の

進学を果たしたという事例よりも、海外留学などの「自分のしたいことを見つけて、その道に飛び込んだ」という色鮮やかな事例である。生徒 C と生徒 D の事例を用いて、学習支援の過程が「フリースクールらしさ」に回収されていく様子を見ていきたい。

<事例 2>

生徒 C は、私立中高一貫校に馴染めず、高校 1 年次にフリースクール A に編入学する。3 年間に在籍後、2012 年 3 月に卒業する。当初は関西私立文系難関校への進学を希望しており、本人のニーズに沿った個別学習が計画される。本人の意志が伴わず、計画された学習支援は立ち消えになる。度々、進学希望を示すも、同じことの繰り返しで継続的な学習支援にはつながらず、卒業後、親の繋がりを頼って、欧州への語学留学を果たす。

(FN:2012 年 9 月)

<事例 2>は、フリースクール A 内の学習支援を活用しながらも、結果的に自身の進学希望が再構築されていくパターンである。生徒 C は、前籍校が私立の中高一貫校であり、「本が読むのが好きで、本多勝一さんの本とかすごい好きで、ジャーナリストになりたいなあって思ってた」(FN:2012 年 5 月：生徒 C) と編入学時のことを述べるように、大学進学の希望を強く示していた。そういった中で、フリースクール A スタッフが大学進学のための個別学習を週 2 回担当することになる。必要な問題集を買い揃えて、課題を指定して、学習計画を本人と立てていくが、個別指導の日程をキャンセルすることが相次いだ。しかし、生徒の「主体性」や「自主性」を尊重するという方針から、キャンセルが咎められたり、個別学習が無理強いされることはなかった。その時のことを振り返って、「せっかく自由な学校に入ってたから、今しかできひんことをしたいなって。みんなで山登ったり、好きな本も読みたいし、アルバイトもしたいなあって。別にやる気がなかったわけではないんやけどね」(FN:2012 年 5 月：生徒 C) とフリースクール A に入学後、その雰囲気になじめ、自身の志望や想いが変化していったことを語っている。その後、母親が海外に移住したことから、彼女も欧州への語学留学を決意することになる。

また、生徒 D は、前籍校からの編入学ではあるものの、前籍校に入学後 1 週間ほどしか通学しておらず、前籍校を中途退学してから 1 年ほど自宅に引きこもっており、前籍校とフリースクール A との間にブランクがあった。興味がある美術系専門学校への進学を希望しており、フリースクール A スタッフが個別学習を受け持つことになる。本人の苦手な数学や英語を中心とした学習計画が立てられるが、「私なんかやっぱりできひんわ」(FN:2011 年 6 月：生徒 D) と弱音を漏らすことも多かった。高校 3 年次になると、フリースクール A への出席数が減り、自宅を中心にして学習に取り組むようになり、両親のサポートから自身の美術作品個展などを開催するようになる。当初の専門学校希望は変わらず持ち続けているものの、「あんまり学校行けてないし、とりあえず高校卒業資格はとりたいし、頑張る」(FN:2012 年 10 月：生徒 D) というように現時点では進路は未定である。

生徒 C と生徒 D の事例では、フリースクール A の学習支援から距離をとりながら、自

己の進学志望を再構築していく過程が読み取れる。学習支援の過程の中で、生徒 C は「海外留学」、生徒 D は「高校卒業資格」といった当初と異なった目標に価値を見出している。生徒 C の事例では、「やりたいことを見つけて、夢に向かっていっている」(FN:2011 年 6 月：代表) というように、その価値観の変容が肯定的に評価されている。生徒 D の事例では、学習支援の過程の中で、美術に関する興味・関心を深めていき、自身の美術作品個展の開催という「彼女らしさ」を発揮しているという文脈で語られる。

特に生徒 C は、フリースクール A のホームページでモデルケースとして取り上げられ、彼女の学校生活に関する手記が載せられている。

自分の経験値が 1 つずつ増えていくことの楽しさを知り、自分の居場所を見つけ、じっくりと自分の将来について考える事の出来る環境で私は毎日を過ごしている。ここでの毎日を考えるのは、大人じゃなくて子供。こういう場所ってホントに少ないんじゃないかと思う。他人と自分を比べる事の無意味さ、そして他人と違う自分を好きでいられる自信。4 年間の不登校生活を経て、この学校に出会い、新たなスタートを切る事が出来た私は、様々な年齢の友達と、頼りにできるスタッフと、インパクトの強すぎる(代表名)先生と共に、たくさんの人と関わり、たくさんの事を学んでいる。

(フリースクール HP より引用 2012/12/01)

こういった取り上げられ方は、他の生徒には見られないことであり、彼女の事例が「フリースクールらしさ」の象徴として語られていることが読み取れる。

このように学習支援を行いつつも、「フリースクールらしさ」として前面に持ち出されるのは、フリースクールの過ごしの中で、学校に捉われない生き方や価値観を見出したという事例であり、「フリースクールらしさ」への回収を戦略的に行っているという点に、フリースクール A における学習支援への距離の取り方が見て取れる。

基礎学力の獲得を目的とした学習支援

フリースクール A には生徒は進学という希望を明確に持っていない生徒も存在する。そういった生徒に対しては、高等学校卒業資格をとるための基礎学力の獲得を目的とした学習支援が行われる。しかし、往々にして、小学校・中学校における学習が不十分で、高等学校における学習に困難を抱えていたり、生徒自身の発達上の特性から、学習自体に拒否反応を示すことが見られる。

<事例 3>

生徒 E は、軽度の発達障害を抱えるため、前籍校に馴染めず入学後すぐに退学し、フリースクール A に編入学してきた。学習にも困難があるが、両親共に学校教員であるためか、学習から遠ざかることに嫌悪を示している。(FN:2012 年 5 月)

生徒 E は、真面目な性格で、レポート課題が配布されると、その場ですぐに取り組む姿がよく見られた。しかし、発達上の特性から、言語のニュアンスの読み取りに困難を抱えており、スタッフの「そこまで頑張らんとゆっくりやったらいいよ」という声かけに対しても、「僕はあんまわかってないし、やらないとお母さんに怒られるんで」(FN:2012 年 6 月:生徒 E) というように、本人に学習に対しての「劣等感」や「自己否定」が見られた。

生徒 E の両親は、共に学校教員であり、入学時どのような学習支援が行われているのかについて熱心に質問をするなど、子どもに対する教育意識の高さが窺いしれた。レポート試験の実施の際も、本人に合格点を確実にとらせるために前日の夜に両親が試験問題を解答しそれを暗記させたり、試験終了後に電話で試験の出来を本人に確認したりする様子が見られた。そういった両親の在り方に、スタッフ会議で「もうちょっと気を抜いて子どもの自主性を尊重したげなあかんわ」(FN:2012 年 8 月:代表) と代表が述べるように、生徒 E が学習を重荷に感じて伸び伸びと過ごせていないことが問題として挙げられ、生徒 E の学習の負担を少しでも減らそうという意図から、単位認定基準を柔軟にし、基準点以下でも再度チャレンジさせるなどの関わりかけを行うことが決められた。⁽⁸⁾

このように基礎学力の獲得を目的とした学習支援においては、絶対的な基準に対して努力させるのではなく、基準を柔軟に変更していくことで「フリースクールらしさ」を維持しようとする姿が見て取れる。

7. 総括

前節では、フリースクール A における学習支援の実際を、個別学習という場面の事例に特化して検討した。保護者の中には学習支援を重視するニーズとフリースクールの活動を重視するニーズが存在し、それを取り入れる形で学習支援が行われている。しかし、その学習支援をどのように活用していくかは、生徒がフリースクール A をどのように捉えているかによって違いが現れることが確認できた。

また、「フリースクールらしさ」を維持していくために、進学よりも、自分のやりたいことを形にしていくというより色鮮やかな事例がフリースクール内で取り上げられる傾向があり、学習支援を取り込むことでフリースクールの雰囲気が学校的なものになることを巧みに回避していた。加えて、基礎学力の獲得を目的とした学習支援においては、単位認定基準を柔軟に相対化し、各自の学力状況に沿った学習内容にすることで、生徒が学習に対して嫌悪を抱くことを回避していた。

こういったフリースクールにおける学習支援の形は、教科学習の必要性和「フリースクールらしさ」との折り合いをつける過程の中で立ち上がってくるものである。不登校経験による社会的自立への不安が指摘されている中で、教科学習の必要性を否定してしまうことは、保護者のコンセンサスを得てより多くの生徒を受け入れることを難しくする。しかし、教科学習をそのまま受容してしまうことは、学校とは対立的に自身を位置取ってきたフリースクール本来の存在意義を損ねてしまうことにつながり、ここでみた状況は「フリースクールらしさ」を模索

しながら作り上げられたフリースクールにおける学習支援の一事例と捉えることができる。

ただそういった「フリースクールらしさ」が生徒の受け皿となっているという側面も否定できない。フリースクールがどのように「居場所」としてあり続けようとするのか、それを問い続けることは、現代の学校制度を問い直すことにもつながると考える。

なお、フリースクールにおける学習支援が生徒の進路や人生観に及ぼす影響も重要な論点であるにも関わらず、本稿では十分に検討することができなかった。今後の課題としたい。

<註>

- (1) 貴戸の著作に対して、東京シュールは2005年に「学校に行かなかった私たちのハローワーク」(東京シュール出版)を出版している。フリースクールを経て、社会的自立を成し遂げた当事者たちの手記を集めたもので、フリースクールが不登校を否定する言説から対極的に自己形成を行ってきていることを示しており興味深い。
- (2) フリースクール的な学びとして、ログハウス作りや映画作成、バンド演奏等が、子どもの自主性と主体性から発案から実践されたものとして紹介されている(奥地,2005)
- (3) NPO 法人全国フリースクールネットワークに加盟のフリースクール団体の特質を俯瞰的に捉えるために自身で質問紙調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。
 - 郵送による質問紙調査(2012年6月・7月にかけて実施)
「フリースクールにおける学習支援について」
 - 対象：NPO 法人フリースクール全国ネットワークに加盟している正会員団体45団体(2012年6月時点)
 - 各FSの代表者(≠代表)一名に、FSの学習支援や子どもの進路の状況などについて記入してもらう。
 - 回収率：53.3%(45団体中24団体)
- (4)あるフリースクールの親の会での卒業生の語りを引用している。(FN:2012年9月)
- (5)「フリースクールらしさ」について、フリースクールのHPには「<楽しくなければ学校じゃない>子どもの自主性を大切に、個性に合った学びを創造する少人数制の学校です。」というキャッチフレーズが掲げられている。
- (6) フリースクールAに関わるボランティア講師。家庭教師を専業としており、「有名国立大卒業のプロ家庭教師」という触れ込みで、フリースクールAにボランティアの志願をしてきた経緯をもつ。
- (7) 卒業時に関東の文系私大を複数受験するが不合格となり、その後は浪人生として外部の予備校に通学している。
- (8) 単位認定基準は各科目30点以上だが、スタッフ会議を踏まえて、試験を受けるということに重きをおいて、受験するだけで30点を与えるという方針に変更された。

<参考文献>

- 藤田智之 2002 「フリースクールの類型化と問題点」『佛教大学大学院紀要』30:93-107
フリースクール全国ネットワーク 2004 『フリースクール白書』
井上烈 2012 「フリースクールにおける相互作用にみるスタッフの感情管理戦略」『フォーラム現代社会学』11:15-28
貴戸理恵, 2004, 『不登校は終わらない——「選択」の語りから<当事者>の語りへ』
新曜社
国立教育政策研究所 2003 『オルタナティブな学び舎の教育に関する実態調査報告書』
文部科学省 1993 『不登校に関する実態調査（平成5年度不登校生徒追跡調査報告書）』
森田 洋司 2003 『不登校-その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』教育開発研究
所
森田 次朗 2008 「現代日本社会におけるフリースクール像再考」『ソシオロジ』
53(29):125-141
奥地圭子 2005 『不登校という生き方—教育の多様化と子どもの権利—』日本放送出版協
会
佐川佳之 2010 「フリースクール運動における不登校支援の再構成」『教育社会学研究』
87:47-67
高山龍太郎 2012 「不登校の居場所づくりの類型化の試み」『日本教育社会学会第64回大
会要綱』
吉田重和 2004 「複線化する日本におけるフリースクールとメインストリームとの関係性」
『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 12(1) 203-213,